



(太宰府・甘木)

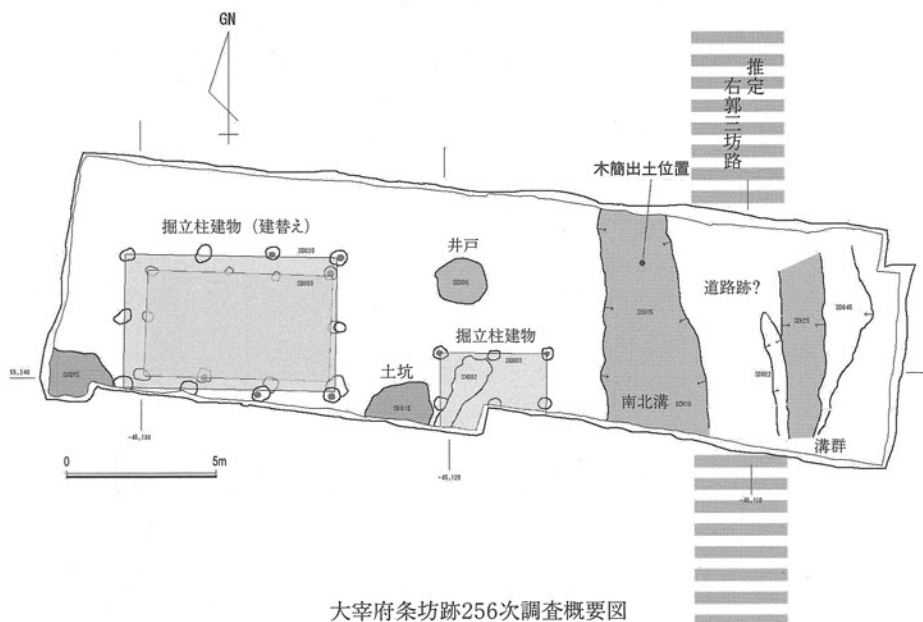
福岡・大宰府条坊跡

- 1 所在地 福岡県太宰府市都府楼南五丁目
- 2 調査期間 第二五六次調査 二〇〇六年(平18)三月
- 3 発掘機関 太宰府市教育委員会
- 4 調査担当者 長 直信
- 5 遺跡の種類 古代都市跡
- 6 遺跡の年代 八世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本遺跡は、奈良時代中頃から後半にかけての生活関連遺跡で、井上信正氏の条坊復元案によれば、右郭二十一条三坊から四坊の条坊

域内に位置する。

検出した主な遺構は、掘立柱建物三棟・井戸一基・土坑一基である。住居と考えられる掘立柱建物SB〇五〇は、南北二間×東西三間の東西棟で、SB〇二〇はその建て替えと考えられる。また、その東側には南



大宰府条坊跡256次調査概要図

北棟と考えられるSB〇三〇がある。これらの遺構群の東側には南北方向の溝SD〇一五が走り、その東岸の硬化した平坦な面は、周辺の調査状況から右郭三坊路の可能性がある。

木簡は、地表下約一五〇cm、南北溝SD〇一五の最も下の腐植土層から一点出土した。主な共伴遺物には、須恵器・土師器があり、八世紀中頃以降の所産とみられる。須恵器には「□□」と墨書されたものが含まれている。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「く此家売

(126)×41×3.5 039*

針葉樹の柁目材。頭部には左右からの削りによる刳り込みが施され、そこに幅約〇・八cmの紐を結びつけた痕跡がある。この幅の広い紐跡は裏面ではなく、この木簡は大きな対象物に結わえつけられていたものと推測される。下部は欠損し、下から約3cmの位置に横方向に折り曲げたような大きな断裂の痕跡が見られる。

文字は楷書で、木簡の幅いっぱい大きく書かれている。現状では墨痕が薄くなり、素地の板が痩せて、文字が浮き上がったように見える。これは墨中のニカワが保護剤となって文字部分を覆っていたため、日光や風雨による素地の劣化が進行した後も文字部分のみが残った結果とみられる。

紐痕があり文字の周囲が劣化していることから、この木簡は一定



期間屋外に晒されていた可能性があり、文意から家屋ないし物品などの売買の表示札として屋外の柱などに括り付けられていたことも想定される。最終的には札の中央付近でへし折られて廃棄されたと考えられる。

このように任意の第三者に家屋を売るため一定期間この付近に掲示されていたとすれば、木簡が出土した溝の東側が右郭三坊路と想定されることも符合し、古代大宰府の都市性の一端を示しているといえよう。

(山村信榮)